

新しい時代 イザヤ書 11 12 章

第一部「ユダとエルサレムについての幻」の最後の 2 章である。悔い改めないユダとエルサレムが、全滅の日を一日一日と近づかせる姿である。

年代的に言うと、前 740 年、ウジヤ王の死んだ年に召命を受けたイザヤが、「心をかたくなにするメッセージ」を宣教するように命令を受け、前 734 年に、アラム(シリア)、イスラエル連合軍の侵入を前にしておびえるアハズ王の姿に、まずその応用篇を見た。更に、アハズ王に謀反を企てて、アラム、イスラエルと連合しようとする民の姿の中にも、不信の態度を見た。その後、ダマスコのレツィン、サマリヤのペカは殺され、代わってイスラエルの王になったホセアも、謀反に気づいたアッシリヤ軍に攻められ、前 721 年にサマリヤは陥落し、イスラエル十部族は捕囚の地に連れ去られた。しかし、イスラエルを滅ぼしたアッシリヤは、ユダの助けになるどころか、かえってユダを悩ました(歴 28 : 20-22)。10 : 9 の預言を見ると、北はカルケミシュからサマリヤに至るまで、ことごとくアッシリヤに滅ぼされ、ユダも風前のともしびであったことがわかる。この預言は、早くても前 717 年以後であるから、イザヤも召命を受けてから二十有余年、年齢も 45 歳ぐらいであったと思われる。若いときのような熱情や一方的な愛国心によって判断を左右されることなく、厳しい目でユダとエルサレムの最後の日を見つめることができたに違いない。「心をかたくなにするメッセージ」を宣教するように命じられた時、「主よ、いつまでですか」と聞き返したイザヤは、今、主の答えを理解できるようになっていた。ユダは一度全滅しなければならぬ。アッシリヤの猛威は、神のさばきの杖であり、むちである。高ぶりの木は倒される(6 : 13、10 : 33,34)。イザヤに与えられた 2 人の男の子の名も、預言の一部を構成した。「マハル・シャルル・ハシュ・バズ」の預言は成就した。しかし、全滅の後、「残りの者」は帰って来る。そして同時に、不思議な「インマヌエル」預言が与えられた(7 : 14 以下)。この「インマヌエル」預言が成就する時、そこには、全く新しい時代が開けるに違いない。それは、権力と組織によって達成する地上の不安定な平和ではない。霊にあふれるインマヌエルの統治により、神と人が和解し、被造世界にも平和がもたらされ、全地から新しく神の民が集められる。12 章は、第一部の最後にふさわしい賛美の詩である。

A エッサイの根(11 : 1-5)

- 1 節 エッサイの根株から新芽が生え、
その根から若枝が出て実を結ぶ。

וַיֵּצֵא חֹטֵר מִגִּזְעֵי יֵשׁוּ וְנֹצֵר מִשְׁרָשָׁיו יִפְרֹחַ: ^{WTT} Isaiah 11:1

<エッサイの根株>。主が林の茂みを斧で切り落とし、切り株ばかりになった時、人間の目からみるなら、それは全く絶望的な状況である(6 : 13)。しかし神は、絶望の中から、新しい芽を生えさせられる。ここで「ダビデの根株」と言われず、<エッサイの根株>と言われていることに注目したい。エッサイはベツレヘムの羊飼いにすぎなかった(サム 16 : 1 以下)。「エッサイの子」という呼び方には、軽蔑の意味がこめられていた(サム 20 : 27、22 : 7-8、 サム 20 : 1、 列 12 : 16)。イザヤは、「インマヌエル」がダビデの家から生まれることを予期しながら、罪と背信のダビデの家でなく(7 : 13)、新しい時代にふさわしいメシヤ像を預言している(マタ 1 : 20、ロマ 1 : 3)。<エッサイ>という用語を選ぶことによって、イザヤは、「インマヌエル」と「ダビデの家」の間の連続性と非連続性を表現した。

2 節 その上に、主の霊がとどまる。

それは知恵と悟りの霊、
はかりごとと能力の霊、
主を知る知識と主を恐れる霊である。

וְנָחָה עָלָיו רוּחַ יְהוָה רוּחַ חֲכָמָה וְבִינָה רוּחַ

עֲצָה וְגִבּוֹרָה רוּחַ דַּעַת וְיִרְאַת יְהוָה

「インマヌエル」には<主の霊>がとどまる(ヨハ 1 : 33-34)。9 : 6-7 の預言がこのみどりごが神またイスラエルの父である面を強調したとすれば、ここでは、聖霊に満たされた面を強調する。「油注がれた者」は、名[□]マーシアハで、そこから「メシア」ということばができています。イザヤは、物質的な油ではなく、霊的な油を注がれたメシア像を考えた。霊の現れは、知的、実際の、霊的の三方面から、二つずつの用語を用いて表現される。

<知恵>([□]ホクマー)は、語源は「さばく」の意味。物事をさばき、判断するために必要な資性が「知恵」である。それは分析的にでなく、総合的にとらえられている。例えば、ソロモンは「知恵の人」であったが(列 3 : 12、4 : 29,34)、それは、物事の判断にも現れ(列 3 : 16-28、5 : 7、10 : 1-3)、知識に現れ(列 4 : 33)、同時に、詩情や文学的才能に現れた(列 4 : 32、箴言)。「知恵」は擬人化され、永遠の口ゴスとしても用いられている(箴言 8 章)。<悟り>([□]ビーナー)は、語源は「分ける」「区別する」であるから、物事の真実を見抜く能力という意味(歴 2 : 12、ヨブ 38 : 4、箴 9 : 10、イザ 27 : 11、29 : 24、33 : 19)。

<はかりごと>([□]エーツァー)は、9 : 6 の「助言者」と同語源。<知恵と悟り>が実際の行動や意思決定とかかわる時、はかりごとが必要になってくる。<能力>([□]ゲブ

ーラー)は、語源は「強い」の意味。「力」(30 : 15)、「(戦)力」(36 : 5)また、神について、その「権威」(詩 54 : 1)、その「権力」(詩 66 : 7)、その「力あるわざ」(申 3 : 24)などと訳される。

<主を知る知識と主を恐れる霊>は、訳し難い個所である。「主についての知識と恐れ」の霊」と訳せば、文字通りに近いと言える。「主について知る」ことは、単なる知識ではなく、深い人格的な信頼関係を意味する(詩 9 : 10、エレ 31 : 33-34)。また「主の恐れ」も、恐怖心よりも、神への信仰と敬虔が強調されている(出 14 : 31、ヨブ 1 : 1、箴言 8 : 13)。

- 3 節 この方は主を恐れることを喜び、
その目の見るところによってさばかず、
その耳の聞くところによって判決を下さず、

וְהָרִיחוּ בִּירְאֵת יְהוָה וְלֹא לְמִרְאֵה עֵינָיו^{WTT} Isaiah 11:3

וְשָׁפוֹט וְלֹא לְמִשְׁמַע אָזְנוֹ יוֹכִיחַ:

聖霊がとどまった結果生じる資性について述べられたが、3 - 5 節では、具体的な状況での現れについて述べられる。まず、神との関係においては、<主を恐れることを喜び>。主への恐れが心のうちからあふれ出る姿勢である。また、人との関係においては、このメシヤが王であり統治者であることを当然としている。さばきをする場合、表面的な印象によって左右されない。

- 4 節 正義をもって寄るべのない者をさばき、
公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、
口のむちで国を打ち、
くちびるの息で悪者を殺す。

וְשָׁפֵט בְּצֶדֶק דְּלִים וְהוֹכִיחַ בְּמִישׁוֹר^{WTT} Isaiah 11:4

לְעַנְוֵי-אֶרֶץ וְהִכָּה-אֶרֶץ בְּשֵׁבֶט פִּי וּבְרוּחַ שְׁפָתָיו יָמִית רָשָׁע:

- 5 節 正義はその腰の帯となり、
真実はその胸の帯となる。

וְהָיָה צֶדֶק אֲזוֹר מִתְּנַיִם וְהָאֱמוּנָה אֲזוֹר חֲלָצִיו^{WTT} Isaiah 11:5

<正義>(ツエデク)が2回繰り返される(5:16 注解)。<寄るべのない者>とは、権利を奪われた無力な者、<貧しい者>とは、搾取され、苦しめられている者を意味する。いずれの場合も、社会的な無力さが焦点になっている。メシヤが来る時、彼が社会的不正をただし、正義と公正を保つための手段は、地上的な権力、軍事力、組織でなく、そのことばである。

B 絶対的平和の樹立 (11:6-9)

6 節 狼は子羊とともに宿り、
ひょうは子やぎとともに伏し、
子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、
小さい子どもがこれを追っていく。

וְגַר זֵאֵב עִם-כֶּבֶשׂ וְנֹמֵר עִם-גֹּדְדֵי יִרְבֵּץ וְעֹגֵל ^{WTT} Isaiah 11:6

וְכַפִּיר וּמְרִיא יִחַדּוּ וְנֹעַר קָטָן נִהְגַּ בָּם:

7 節 雌牛と熊とは共に草をはみ、
その子らは共に伏し、
獅子も牛のようにわらを食う。

וּפְרֵה נָרִב תִּרְעֶינָה יִחַדּוּ יִרְבְּצוּ יַלְדֵיהֶן ^{WTT} Isaiah 11:7

וְאַרְיֵה כִּבְקָר יֹאכַל-תְּבֹן:

8 節 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、
乳離れた子はまむしの子に手を伸べる。

וְשִׁעֲשַׁע יוֹנֵק עַל-חֹר פֶּתֶן וְעַל מְאוּרֹת צְפַעוֹנִי ^{WTT} Isaiah 11:8

גְּמוּל יָדוֹ הָדָה:

メシヤ来臨の結果は、地上の平和だけでなく、被造世界における平和の回復である。<獅子も牛のようにわらを食う>。肉食獣が草食獣に転換する。ここでイザヤは当然、墮落以前の被造世界を考えていたに違いない。そこではすべての動物が草食

であった(創 1 : 29-30)。すべては平和であり、すべてはよかった。そして、人は創造の冠であり、被造世界を治めるべきであった(創 1 : 26-28)。イザヤが未来の終末的幻に目を注ぐ場合、まず、過去をしっかりと見つめ、神が創造された調和ある平和な世界に思いをはせていた。

- 9 節 わたしの聖なる山のどこにおいても、
これらは害を加えず、そこなわない。
主を知ることが、
海をおおう水のように、地を満たすからである。

לֹא־יִרְעוּ וְלֹא־יִשְׁחִיתוּ בְּכָל־הָר קָדְשִׁי ^{WTT} Isaiah 11:9

כִּי־מִלְאָה הָאָרֶץ דַּעַה אֶת־יְהוָה כַּמַּיִם לַיָּם מִכֶּסֶּיִם: פ

原文では、初めに<これらは害を加えず、そこなわない>があるので、前節のコブラやまむしが無害であることを意味するととれるが、ヤングは、動物でなく、人を指すと解釈する。6 - 8 節の被造世界の平和から、人間社会の平和へと言い及んでいと理解するのである。その場合、<これら>を「彼ら」と言い替えなければならぬが、もちろん文法上可能である。主を知る知識の霊に満たされるメシヤが来て、主を恐れることを喜びつつ、さばきと統治をする時、主への信頼と賛美が全地に満ちあふれる。

C 残りの者の帰還 シェアル・ヤシュブ (11 : 10 - 16)

イザヤは、「シェアル・ヤシュブ」の預言の成就が、全地に散った神の民の帰還のうちに見られると考えた。6 - 9 節では、幻が、墮落以前の被造世界をパターンとして描かれたが、10 - 16 節の幻は、出エジプトをパターンとして描かれる。こうして預言者の未来図は、単なる夢想ではなく、過去における神のみわざの中に根を下ろし、同じ生ける神のお働きによるものとして描かれた。600 年前に、エジプトからイスラエルを贖い出された神は、神のさばきによって全地に散らされたイスラエルをもう一度呼び戻される。

10 節 その日、

エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、
 国々は彼を求め、
 彼のいこう所は栄光に輝く。

וְהָיָה בַּיּוֹם הַהוּא שָׂרֵשׁ יִשְׂרָאֵל עֵמֹד לְגֹסֶם ^{WTT} Isaiah 11:10

עַמִּים אֵלָיו גּוֹיִם יִדְרְשׁוּ וְהִיְתָה מִנְחָתוֹ כְּבוֹד: פ

11 節と切り離す注解者があるが、実際は不可能である。<その日>は、11 節にも繰り返され、重要な解釈の鍵となる(2:2,12,4 : 2,10 : 20,12 : 1,4)。<エッサイの根>

1 節注解。<根>(☒ショーレシュ)は、1 節と 53 : 2 にも用いられる。このことばが用いられることにより、メシヤ像は「目立たない、みずぼらしいもの」ということが強調される。それが<国々の民の旗として立ち><国々は彼を求め>のようになるところに、新しい時代の「新しさ」がある。その<栄光>が、この世の権力、金力、豪華さによるものでないことは、もちろんである。

11 節 その日、主は再び御手を伸ばし、

ご自分の民の残りを買取られる。
 残っている者を、アッシリヤ、エジプト、
 パテロス、クシュ、エラム、
 シヌアル、ハマテ、海の島々から買取られる。

וְהָיָה בַּיּוֹם הַהוּא יוֹסִיף אֲדָנָיו שְׁנִית לְדָו ^{WTT} Isaiah 11:11

לְקַנּוֹת אֶת־שְׂאֵר עַמּוֹ אֲשֶׁר יִשְׂאֵר מֵאַשּׁוּר וּמִמִּצְרַיִם

וּמִפַּתְרוֹס וּמִכּוּשׁ וּמִעִילָם וּמִשְׁנַעַר וּמִחַמַּת וּמֵאֵי הַיָּם:

<その日>が繰り返される。<残り>(☒シェアル) 4:3 注解。<買取られる>は、普通の「買う」であるが、ここと、出エジプト記 15 : 16、詩篇 74 : 2 では、明らかに贖いの思想が表れている(出 15 : 13、詩 77 : 15、イザ 43 : 1、51 : 10、エレ 31 : 11)。<残っている者>は、動詞で、☒シャーアルの受身語幹。神によって再創造された「残りの者たち」は、全地に残されている。<パテロス>は上エジプト、すなわちエジプトとエチオピアの中間地帯を指す。<クシュ>はエチオピア。<エラム>はペルシャ湾の北東地方。<シヌアル>はバビロニア地方(創 10 : 10)。<ハマテ> 10 : 9

注解。<海の島々>は地中海岸を指す。

- 12 節 主は、国々のために旗を揚げ、
イスラエルの散らされた者を取り集め、
ユダの追い散らされた者を
地の四隅から集められる。

וְנִשְׂא נֶס לְגוֹיִם וְאֶסַף נְדָחֵי יִשְׂרָאֵל וְנִפְצוֹת

WTT Isaiah 11:12

יְהוּדָה יִקְבֹּץ מֵאַרְבַּע כְּנָפוֹת הָאָרֶץ:

- 13 節 エフライムのねたみは去り、
ユダに敵する者は断ち切られる。
エフライムはユダをねたまず、
ユダもエフライムを敵としない。

וְסָרָה קִנְאֵת אֶפְרַיִם וְצָרְרֵי יְהוּדָה יִכְרְתוּ

WTT Isaiah 11:13

אֶפְרַיִם לֹא יִקְנֵא אֶת־יְהוּדָה וְיְהוּדָה לֹא יִצַּר אֶת־אֶפְרַיִם:

10,11 節がもう一度繰り返される。<旗>とは、もちろん「エッセイの根」である。
<エフライム>は、北イスラエル十部族の代表名。イスラエルとユダの間に横たわる
最大の問題は<ねたみ>であることが明らかにされるが、「エッセイの根」が旗として
揚げられ、まことの平和が来る時、<ねたみ>も消滅する。

- 14 節 彼らは、西の方、ペリシテ人の方に飛びかかり、
共に東の人々をかすめ奪う。
彼らはエドムとモアブにも手を伸ばし、
アモン人も彼らに従う。

וְעָפוּ בְּכַתְּף פְּלִשְׁתִּים יָמָּה יַחְדָּו יָבוּזוּ

WTT Isaiah 11:14

אֶת־בְּנֵי־קֶדֶם אֲדוֹם וּמוֹאָב מִשְׁלֹחַ יָדָם וּבְנֵי עַמּוֹן

מִשְׁמַעְתָּם:

15 節 主はエジプトの海の入江を干上がらせ、
また、そのやけつく風の中に
御手を川に向かって揺り動かし、
それを打って、七つの水無し川とし、
くつばきのままで歩けるようにする。

וְהִחַרְתִּים יְהוָה אֶת לְשׁוֹן יַם־מִצְרַיִם וְהִנְיַף

WTT Isaiah 11:15

יָדוֹ עַל־הַנָּהָר בְּעֵינִים רוּחוֹ וְהִכְהִיז לְשִׁבְעָה נַחְלִיִּים וְהִדְרִיף

בְּנַעְלִים:

14 節は、文字通りの侵略ととるべきではなく、神の民が、もはや西のペリシテ人、東のアラム人、南のエドム人、南東のモアブ人、アモン人に悩まされず、霊的支配を確立することを指す。また、エジプトにも神の大能の御手が伸ばされる。<7 つ>は「多くの」という意味。

16 節 残される御民の残りの者のために
アッシリヤからの大路が備えられる。
イスラエルがエジプトの国から上って来た日に、
イスラエルのために備えられたように。

וְהִיְתָה מִסְלָה לְשָׂאֵר עַמּוֹ אֲשֶׁר יִשְׂאָר

WTT Isaiah 11:16

מֵאֲשׁוּר כְּאֲשֶׁר הִיְתָה לְיִשְׂרָאֵל בְּיוֹם עָלְתוֹ מֵאֶרֶץ מִצְרַיִם:

<残りの者>(☒シエール) 4 : 3 注解。<大路>は、この後のイザヤ書に何回も出て来る、イザヤ書の統一性を支持する鍵のことばである(19 : 23、33 : 8、40 : 3、49 : 11、59 : 7、62 : 10)。<アッシリヤからの大路>は、具体的な捕囚からの帰還を考えるよりも、むしろ、エジプトと対照され、神が南からも北からも<残りの者>を呼び集められる表現ととる方がよい。最後に、イザヤは、「出エジプト」の大いなる神のみわざが、新しい時代の起爆力であり、土台であることを強調して、この段落の預言を閉じる。

D 感謝と賛美の歌(12 章)

12 章は、第一部の結びにふさわしい感謝と賛美の歌である。イスラエル人はよく歌を歌った。夜回りの歌(21:11,12)、酒飲みの歌(22:13)、井戸掘りの歌(民 21:17-18)、嘆きの歌(サム 1 : 19-27)とさまざまである。しかし何よりも彼らは、事あるごとに、神への感謝と賛美の歌を歌った。イスラエル人が、出エジプトの偉大な奇蹟を体験した時、まずしたことは、神を賛美することであった(出 15 章)。ダビデがエルサレムを首都と定め、契約の箱を町に運び入れた時、彼自身が主を賛美し、はねたり踊ったりした(サム 6 : 12-16)。

こうした賛美の方法は、出エジプトの時のミリヤムと女たちの歌い方によく示されている。「ミリヤムは人々に答えて歌った」(出 15 : 21)。「答える」は、「和する」の意味である。それは、現代音楽の和音でなく、交唱である。一人のリーダーが歌うと、女たちがそれに和して答え、会衆が和して答えるということを繰り返す。それゆえ、聖書に書かれている内容だけしか歌わなかったと考えてはならない。出エジプト記 15 : 21 と 15 : 1 とは同じであるから、当然ミリヤムは 15 : 2 以下も歌っていったに違いない。新約では、ヨハネの黙示録に描かれている天の御座の前での賛美に、よくその姿を見ることができる。例えば、5:9-14 を見ると、9,10 節で、聖徒たちが新しい歌を歌い、次に 12 節で、御使いたちが大声で歌い、更に 13 節で、天地一切の被造物が賛美し、14 節で、四つの生き物がアーメンと言っている。しかし、賛美はそれで終わるわけでない。ここには、私たちの想像を絶する賛美の大合唱、交唱、和唱の一部が記録されているにすぎない。

以上の賛美の仕方をイザヤ書 12 章に当てはめてみると、ここには同じような交唱が考えられていることがわかる。なぜなら、賛美する者は、1、2 節では「あなた」と単数であり、4-6 節では「あなたがた」と複数だからである。1,2 節にミリヤム、4-6 節に女たち、そして、彼女たちの前に、和唱する会衆を想像しつつ歌ってみると、この歌がよく味わえる。しかし、12 章には、もう一つ、3 節が挿入されている。これは、12 章が賛美のドラマであることを示している。

1 節 その日、あなたは言おう。

「主よ。感謝します。
あなたは、私を怒られたのに、
あなたの怒りは去り、
私を慰めてくださいました。」

וְאָמַרְתָּ בַּיּוֹם הַהוּא אֲדֹרָה יְהוָה כִּי אָנַפְתָּ בִּי ^{WTT} Isaiah 12:1

יֵשֶׁב אִפְךָ וְתִנְחַמְנִי:

<その日> 2 : 2,12、4 : 2、10 : 20、11 : 10、11、12 : 4。<私を怒られた>。10 章まで

に、イスラエルの民が罪と不信のうちに神のさばきの下にある姿を見たが、ここの告白は、まず、個人的な告白である。罪の悔い改めはまず個人から始まる(6 : 5 注解)。<あなたの怒りは去り>の根拠は示されていない。11 章のメシヤ預言と残りの者の帰還が、当然前提とされているからである。<私を慰めてくださいました>。主が怒りを取り去られるだけでなく、慰め主であることが告白される。すべては神のイニシアチブによって達成された。

2 節 見よ。神は私の救い。

私は信頼して恐れることはない。

ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。

私のために救いとなられた。

וַיִּזְמַרְתָּ יְיָ יְהוָה וַיְהִי־לִי לִישׁוּעָה: ^{WTT} Isaiah 12:2

וַיִּזְמַרְתָּ יְיָ יְהוָה וַיְהִי־לִי לִישׁוּעָה:

後半は、出エジプト記 15 : 2 の繰返しである。イザヤが出エジプト伝承に堅く立っていたことがわかる。あの時モーセが「恐れてはいけない」と民を励まし(出 14 : 13)、その後、イスラエル救済史において、「恐れてはいけない」は重要な神学用語となったが(7 : 4 注解)、今、<私は信頼して恐れることはない>と告白される。

3 節 あなたがたは喜びながら

救いの泉から水を汲む。

וּשְׂאֵבֹתֵם־מִיּוֹם בְּשִׁשׁוֹן מִמַּעַיְנֵי הַיְשׁוּעָה: ^{WTT} Isaiah 12:3

前述のように、賛美の間に行為が挿入される。神は救いであって、一切は神から来るが、信仰を持った者は、<救いの泉から水を汲む>行いを必要とする(ヨハ 7 : 37-38)。ドラマ形式で賛美がなされながら、その間に、水を汲む行いが繰り返されたのであろう。

4 節 その日、あなたがたは言う。

「主に感謝せよ。

その御名を呼び求めよ。

そのみわざを、国々の民の中に知らせよ。

御名があがめられていることを語り告げよ。

וַיִּזְמַרְתֶּם בַּיּוֹם הַהוּא הוֹדוּ לַיהוָה קְרָאוּ ^{WTT} Isaiah 12:4

בְּשֵׁמוֹ הוֹדִיעוּ בְּעַמּוּם עַל־לִילְתֵי הַזְּכִירוֹ כִּי נִשְׁגַב שְׁמוֹ:

5 節 主をほめ歌え。

主はすばらしいことをされた。

これを、全世界に知らせよ。

זָמְרוּ יְהוָה כִּי גִּאֲוֹת עָשָׂה (מִיִּדְעָת) [מִיִּדְעָת] ^{WTT} Isaiah 12:5

זָאת בְּכָל־הָאָרֶץ:

賛美するものは<あなたがた>と複数になる。また、1,2 節では、神への告白と独白形式であったのに対し、4-6 節では、会衆への語りかけ形式となる。ここに 7 つの命令形が用いられている。感謝と賛美は、全地への宣教となる。イザヤはマタイの福音書 28 : 18-20 を先取りしていた。<その日> 1 節。

6 節 シオンに住む者。

大声をあげて、喜び歌え。

イスラエルの聖なる方は、

あなたの中におられる、大いなる方。」

צְהִלִי וְרַנִּי יוֹשְׁבֵי צִיּוֹן כִּי־גָדוֹל בְּקִרְבְּךָ ^{WTT} Isaiah 12:6

קְדוֹשׁ יִשְׂרָאֵל: פ

<大声をあげて、喜び歌え>。24 : 14、42 : 10、11、44 : 23、52 : 9、54 : 1 にも同じような表現が繰り返される。<イスラエルの聖なる方>は、イザヤ独自の表現である(1 : 4 注解)。12 章の中に用いられている単語、表現は、イザヤ書全体に用いられているものが多く、イザヤ書の統一性を考察する場合に、重要な示唆を与える。